

今週の為替相場見通し(2017年5月15日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		112.37 ~ 114.38	113.37	111.00 ~ 116.00
ユーロ	(ドル)		1.0839 ~ 1.1024	1.0934	1.0800 ~ 1.1100
(1ユーロ=)	(円)		122.99 ~ 124.58	123.90	122.00 ~ 125.00
英ポンド	(ドル)		1.2844 ~ 1.2990	1.2886	1.2800 ~ 1.3150
(1英ポンド=)	(円)	*	145.66 ~ 148.11	146.15	145.00 ~ 149.00
豪ドル	(ドル)		0.7329 ~ 0.7425	0.7385	0.7250 ~ 0.7500
(1豪ドル=)	(円)	*	83.18 ~ 84.34	83.74	82.00 ~ 85.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 下山 泰典

(1)今週の予想レンジ: 111.00 ~ 116.00 円

(2)ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

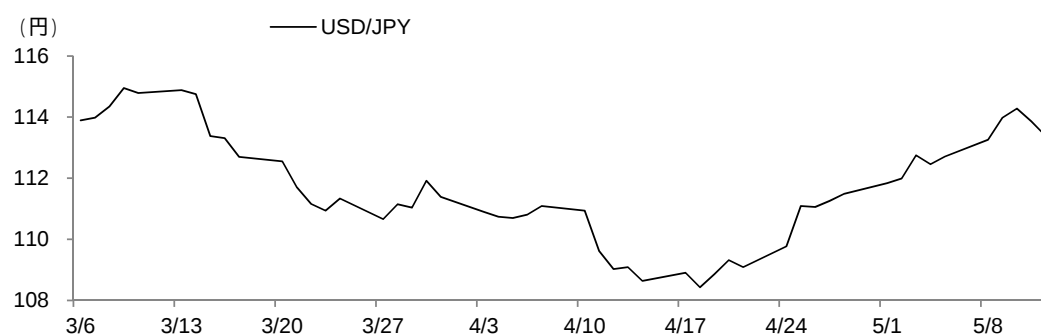
先週のドル/円相場は週半ばにかけて上昇するも、その後はやや上値が重い展開。週初8日は112.66円で東京時間オープン。7日に実施されたフランス大統領選挙において親EU派のマクロン氏の勝利が報じられ113円台まで上昇。一旦は調整するもNY 時間にFRB 高官からタカ派的な発言が相次ぐと反発。9日も米長期債利回りの上昇を受け、海外時間には3月15日以来となる114円台前半まで上昇。その後は北朝鮮が核実験の実行を示唆したことから113.77円まで急落するも、引けにかけて114円近辺まで値を戻した。10日には軟調となった米10年債入札の結果から米長期債利回りが上昇しドル/円は一時週高値となる114.38円をつけた。11日は水準感やこれまでの上昇スピードの速さが意識されてか上値を追う展開とはならず、加えて北朝鮮が弾道ミサイルテストを行うとの報道や米株の下落を受けて一時113円台半ばまで下落した。12日は米4月小売売上高の弱い結果を受けて113円台前半まで下落するが、その水準では下げ止まり、113.37円で越過した。

今週のドル/円相場は、底堅い展開を予想する。先週末発表された米4月小売売上高は市場予想をやや下回る結果だったが、2か月連続で改善した。市場は4~6月期での米景気回復を期待している筋も多いが、それを失望させるほどの結果とは考えていない。短期筋などのドルロングポジションの積み上がりもあり、今回やや調整は入ったが、113円台前半では底堅さを見せた。市場における6月FOMCでの利上げ期待は依然として高く、一段のドル売りには繋がりにくいだろう。ただ、注意すべき事項は多い。北朝鮮によるミサイル発射など地政学的リスクの高まりはもちろんだが、中国の景気減速リスクを警戒しておきたい。15日(月)に4月の鉱工業生産・固定資産投資・小売売上高が発表されるが、足元まで上海株が大きく下落しており、同国の景気減速リスクに再び焦点が当たりやすい状況となっている。発表される指標が弱い結果となった場合、その背景に規制など一時的要因があったとしても、ファンダメンタルズの悪化が続くとの懸念が強まる可能性は否定できない。また今月下旬のOPEC総会を巡り、原油価格の動向も不安定になりやすい。ドル/円は基本的には底堅い展開を予想するが、これらのリスク要因には警戒しておきたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(5/8~5/12)の値動き:

安値 112.37 円 高値 114.38 円 終値 113.37 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.0800 ~ 1.1100 122.00 ~ 125.00 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週のユーロ相場は下落する展開。週初8日、フランス大統領選においてマクロン氏が勝利するも、利益確定の売りなどを背景にユーロ/ドルは欧州時間にかけて1.10台から1.09台半ばまで値を下げた。NY時間では米金利の上昇を背景にドル買いが強まり1.0916まで一時下落。9日、前日の流れを引き継ぎ、1.09を割り込む展開となった。その後、ショイブレ独財務相の「ECBの金融政策正常化は近い将来に始めるべき」との発言を受け上昇するも、この買いは続かず、直ぐに1.0864まで反落。10日にはドラギECB総裁がユーロ圏景気の改善に言及したものの、金融緩和策の継続を示唆したことからユーロ/ドルの反応は限定的だった。NY時間に入り、米金利が上昇しドル買いが強まったことで、ユーロ/ドルは1.0854まで下落。11日、イングランド銀行(BOE)の金融政策委員会の会見で、カーニー総裁が実質賃金の伸び悩みを受け家計消費が低迷する可能性を示唆すると、ポンド/ドルは急落。ユーロ/ドルも連れ安となったが、NY時間にドル安が進んだことで値を戻し1.0861で取引を終えた。12日は米国より4月消費者物価指数(CPI)、4月小売売上高が発表され、市場予想通り、もしくは市場予想をやや下回る結果に全体的にドル売りの流れとなるとユーロ/ドルは1.09台を回復。その後、一部報道機関からECBが来年初めにテーパリング(月間債券購入額を100億~200億ユーロ縮小)を開始するとの内容が伝わるとユーロ/ドルは一段高の展開となり、一時1.0935まで上昇し、1.0930レベルで越えた。

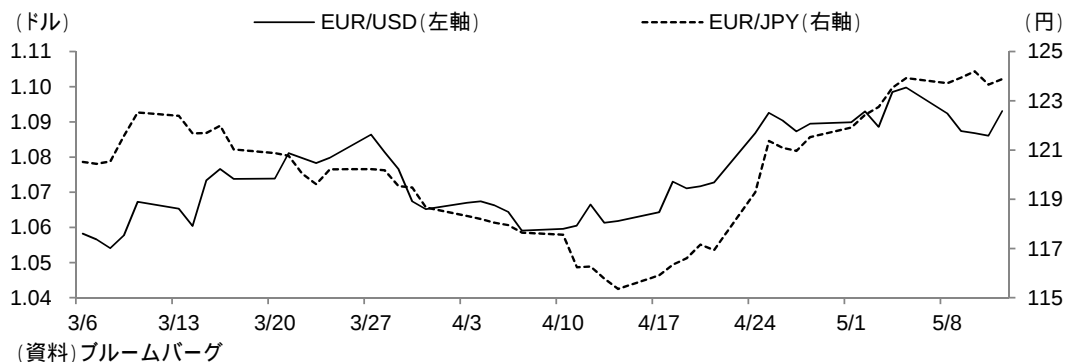
今週のユーロ相場は底堅い展開を予想する。先週のユーロ相場はフランス大統領選を消化した後の材料出尽くし感と好調な米ファンダメンタルズを背景としたドル買い地合いに下落基調をたどった。しかし、6月FOMCにおける25bpの利上げは、ほぼコンセンサスとなっている状況下、これ以上織り込みが進む余地は乏しい。むしろ先週金曜日に見られたように、市場予想をやや下回った米経済指標をきっかけにドルロングポジションの巻き戻しが進む可能性が高い。すでに足許のドル買い地合いには一服感が広がっている印象を受け、今週はドル主導でユーロが下落する展開は想定していない。一方、欧州発の材料はユーロ高を示唆しているように思える。今年最大の政治リスクと言われたフランス大統領選を無難にこなし、ユーロ安材料が1つ取り除かれた格好。ECBは明らかに出口戦略を模索する声が強まっており、今後ユーロ相場を下支えする最大の材料になり得ると思われる。現時点ではドラギ総裁が緩和策継続の認識を示していることで、辛うじてECBのハト派姿勢は維持されている格好だが、近い将来テーパリングをマーケットに織り込ませに動く可能性は十分にあると思われる(かつてのバーナンキ前FRB議長のように)。また、テクニカル的には1.0850~60レベルが明確にサポートラインとして意識されており、さらにその少し下の200日移動平均線(1.0830近辺)も重要ポイントの1つ。これらの水準を下値目途として今週のユーロ相場は底堅い推移を予想している。今週のユーロ圏の目立った経済指標は16日(火)に1~3月期GDP(改定値)、19日(金)に5月消費者信頼感などの発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/8~5/12)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0839 高値 1.1024 終値 1.0934

(対円) 安値 122.99 高値 124.58 終値 123.90



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2800 ~ 1.3150 145.00 ~ 149.00 円

(2) ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、対円・対ユーロで概ね横ばい、対ドルでは下落。週末のフランス大統領選挙の最終投票で予想通りマクロン候補が勝利すると、ユーロ高・円安でオープン。ただし、第一回投票とは異なり概ね結果は織り込み済みで、ポンド円では前週末対比で0.35円程度の上昇に留まり、フランス株式市場はむしろじりじりと下落基調、ポンドも8日の日中で上昇分を全て戻す展開。週末にかけては、各市場のボラティリティが軒並み低下する中、6月8日に予定される英国総選挙に向け与党保守党の支持率が堅調に推移、円安ポンド高が進行し昨年12月以来の148円超を一時記録した。ただし、11日の英中銀金融政策委員会では、メンバーであるソーンダース委員が4月後半に早期の利上げ実施をほのめかす発言をしていたことから、フォーブス委員に加え利上げに賛成するのではと一部で期待されていたが、結局は7対1(フォーブス委員は利上げを支持)で金利据え置きを決定。ポンド安に転じ、北朝鮮のミサイル関連のヘッドラインもあり147円を割れ、週内の上昇分を戻した。対ドルでは週明けは節目とみられる1.300目前で推移、その後はやや下落するも、10日にトランプ米大統領がコミーFBI長官を突然解任すると、ドルが売られ再び1.300付近まで上昇。ただしまたも上抜けることはできないまま、11日の英中銀金融政策委員会を受けポンド安に転じ、1.290割れまで進行した。

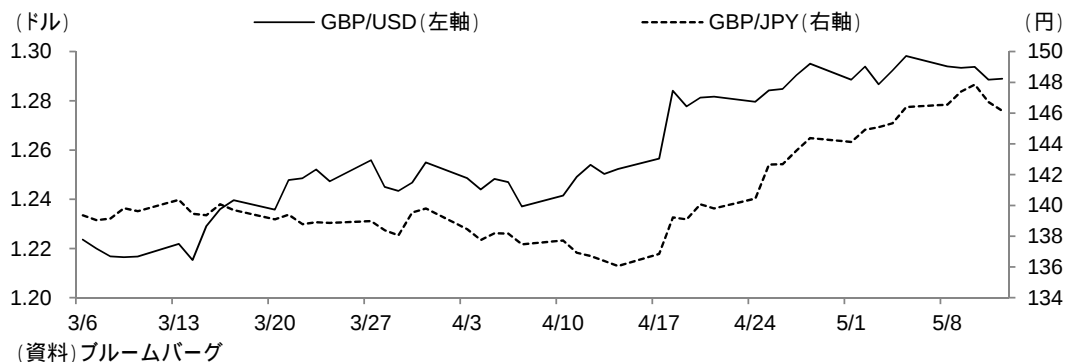
今週の英ポンド相場は、堅調な推移を予想する。英中銀金融政策委員会を終え、これまで一部が期待していた政策の変更がなかったことから、当面は金融政策が材料とはなりにくい。他方、政治的には6月8日の総選挙に向け、メイ首相を中心とする与党保守党が優位に進める一方、労働党は対立構図を依然として見いだせずにいる。これから2年に渡る厳しいであろう離脱交渉が控えているものの、ひとまず安定政権の樹立とハードブレクジット回避に向け楽観的な雰囲気が続いており、期待感の高まりによるポンドの堅調な展開を予想する。週内の予定としては、16日(火)に英4月消費者物価指数及び英4月生産者物価指数、17日(水)に英1～3月失業率(ILO基準)、18日(木)に英4月小売売上高の発表が控えている。11日に既に発表された鉱工業生産指数は英中銀金融政策委員会直前でさほど話題にはならなかったものの市場予想対比で下振れており、EU離脱決定後の影響がどこまで顕在化するかに注目が集まる。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/8～5/12)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2844 高値 1.2990 終値 1.2886

(対円) 安値 145.66 高値 148.11 終値 146.15



4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.7250 ~ 0.7500 82.00 ~ 85.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは対ドルで軟調推移。0.73台前半から0.74台前半のレンジ相場を基調としつつも豪ドル売りが優勢となった。週初8日、対ドル0.74台前半、対円83円台後半でオープンした豪ドルは、前週末に実施されたフランス大統領選挙で予想通りマクロン氏が勝利し市場に安心感が拡がると、対ドル週高値の0.7425まで上伸した。しかしその後は、米債利回りの上昇を背景にドル買い優勢の展開になると豪ドルはじりじりと0.73台後半まで下落した。さらに翌9日は、注目の豪3月小売売上高が前月比+0.3%の増加予想に反して同▲0.1%の減少と冴えない結果となったことを受けて、豪ドルが対ドル0.73台半ばまで急落。さらに米FRB高官のタカ派的な発言からドルが主要通貨に対して買い優勢になると豪ドルは対ドル週安値の0.7329まで値を下げた。その後、週央10日にかけて安値水準からの買戻しが入り対ドル0.73台後半まで回復すると、原油価格が供給過剰懸念の後退を受け上昇し、豪ドルは0.74ちょうど目まで連れ高に。しかし、勢いは続かず、0.73台半ばへ反落した。翌11日は、目立ったニュースもなく手掛かり難につき、豪ドルは対ドル0.73台半ばを挟んで横ばい推移。週末12日は米4月小売売上高や米4月消費者物価指数(CPI)が市場予想を下回る内容となったことで、7月以降の米利上げ観測が後退し米金利が低下すると豪ドルは0.74台前半まで急進。しかし終盤にかけて売り戻され、結局対ドル0.73台後半、対円83円台後半で越週している。

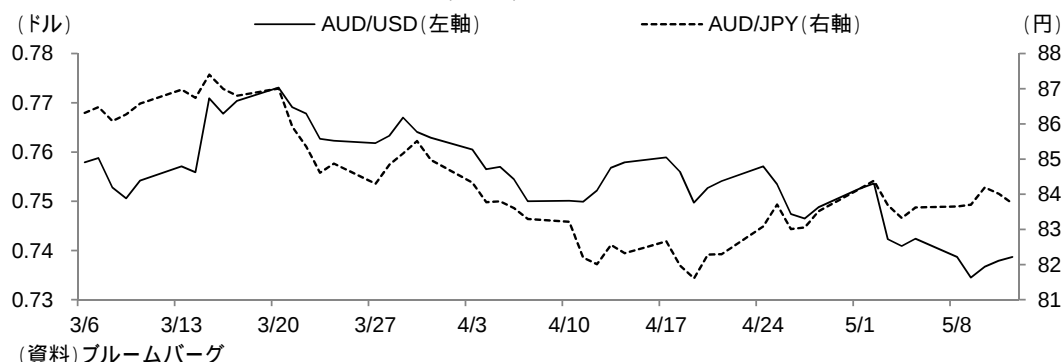
今週の豪ドルは引き続き方向感を探るレンジ相場を予想する。先週は鉄鋼石価格が軟調となる中、冴えない豪3月小売売上高などの経済指標を背景に豪ドルは緩やかに下落した。今週は豪州国内のイベントに応じて豪ドルが上下することが予想されるものの基本的にはレンジ相場となろう。まず16日(火)に豪準備銀行(RBA)金融政策決定理事会(5月2日分)議事要旨が発表される。前回のRBA理事会では、市場予想通り政策金利が1.50%に据え置かれた。声明文では物価動向について上昇圧力があるとするも、金融政策については中立的な姿勢を維持しており、当面は政策金利が据え置かれることを示唆していた。発表される議事要旨で仮に将来の利上げ前倒しを示唆するような内容が確認されれば、豪ドルは素直にサポートされるであろう。また18日(木)には豪4月雇用統計が予定されている。3月の統計では、就業者数が1年半ぶりに前月比+60.9千人増と市場予想の+20千人増を大幅に上回った。フルタイム従業員の増加を主因としたものであり、今月2日に行われたRBA理事会の声明文でも労働市場に対する見方を上方修正していた。仮に今回4月の統計が声明文に反して弱い内容となればRBAの利上げ期待が後退し豪ドルは下落するであろう。また国外の経済指標としては、中国で15日(月)に4月小売売上高、4月鉱工業生産が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(5/8 ~ 5/12)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7329 高値 0.7425 終値 0.7385

(対円) 安値 83.18 高値 84.34 終値 83.74



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。